

低リスク状況下におけるリスクテイキング

○森泉慎吾¹・臼井伸之介¹

(¹大阪大学大学院人間科学研究科)

キーワード：リスクテイキング，リスク認知，ベネフィット認知

Risk-taking under low risk condition

Shingo MORIIZUMI¹ and Shinnosuke USUI¹

(¹Graduate School of Human Sciences, Osaka Univ.)

Key Words: Risk-taking, Risk perception, Perceived benefit

目的

重大事故に繋がりうるリスクテイキング（意図的な危険の受容行為）は、危険に対する主観的な見込みであるリスク認知と負の相関関係にあるとされる（e.g., McKenna & Horswill, 2006）。すなわち、リスクの高低は行動頻度と線形に関係することが想定されるが、リスクの高低によるリスクテイキングの意思決定プロセスの相違が近年指摘されている。例えば Harinck et al. (2007) は、リスクを被った際の損害が小さい場合、その損害の影響が無視される可能性を指摘している。また、森泉・臼井（2013）の質問紙調査によれば、リスクテイキングにおけるリスクが高い場合、行動に強く影響するベネフィット（見返り）に対する心理的価値はリスクによって低下するものの、リスクが低い場合では、ベネフィットの心理的価値はリスクのない時と同等であった。本研究では、低リスク状況下におけるリスクテイキングについて、リスクを被る確率を操作した実験を行った。上記に基づけば、低リスク状況下では、被りうる損害が小さいため、その発生確率はリスクテイキングの敢行頻度の影響を受けないと仮定される。

方法

実験参加者 21歳から29歳までの男女20名（男性10名、女性10名）であった。平均年齢は24.90歳（SD=2.73）であった。参加者は、人材派遣会社を通じて募集され、実験参加の謝金として3,000円が支払われた。

課題 課題は知覚判断課題（ターゲットと判断基準との一致を弁別するダミー課題；Figure 1 左）と上書き課題（「知覚判断課題の保存」と称した課題；Figure 1 右）で構成された。上書き課題には、上書き待機時間の発生（5秒間）という時間的コストが伴った。上書きは省略可能であり、まとめて上書きが可能であることを教示した。その場合、上書きに失敗する可能性があり、「失敗1回につき1円を謝金から差し引く」と虚偽の教示を行った。よって本実験では、上書きの「省略回数」をリスクテイキングの敢行頻度と定義した。また、参加者が上書きした回数を把握できるように、上書き回数を画面上部に表示した。

リスク条件 まとめての上書きが必ず失敗する「確実」条件、「失敗する可能性がある」と教示される「可能性」条件（実際に失敗することはない）の2水準であった。どちらの条件が先に提示されるかはカウンタバランスをとった。

質問紙 リスクに対する認知として「（上書き失敗に対する）危険評価」、「上書き失敗の主観的な発生見込み」、「被害の深刻さ」の3項目、ベネフィットに対する認知として「上書き省略にどの程度得を感じるか」について、それぞれ10件法にて回答を求めた。

デザイン リスク条件（確実／可能性）の1要因参加者内計画であった。

手続き 知覚判断課題の後に上書き課題について教示し、練習試行にて上書きが実際に失敗する様子、またその発生確率を体感させた。知覚判断課題1回と上書き課題1回を合わせて1試行として、計140試行の本試行を実施した。

結果

分析対象者18名について、リスク条件を独立変数、省略回数を従属変数とする t 検定を実施した。その結果、「確実」条件（ $M = 16.57, SE = 8.67$ ）よりも「可能性」条件（ $M = 32.72, SE = 10.96$ ）の省略回数が有意に多かった（ $t(17) = 2.11, p < .05, d = 0.41$ ）。ただし、いずれの条件でも省略をした参加者は、省略をした全参加者（11名）のうち54.5%（6名）であった。次に、各条件での省略回数を説明する要因について検討するために、「確実」条件では「危険評価」「被害の深刻さ」「ベネフィット認知」の3変数、「可能性」条件では「失敗の主観的な発生見込み」を加えた4変数を独立変数としてそれぞれ重回帰分析を実施した。その結果、「確実」条件では「危険評価」のみ（ $\beta = -0.42, p < .10, Adj.R^2 = .12$ ）、「可能性」条件では「ベネフィット認知」のみ（ $\beta = 0.48, p < .05, Adj.R^2 = .19$ ）、それぞれ有意傾向または有意に省略回数を説明した。

考察

低リスク状況下において、損害を被る確率はリスクテイキングの敢行頻度に影響を及ぼしていたものの、「敢行の有無」という点では影響しない可能性が示唆された。また、損害に確率が伴う状況では、リスク認知ではなく、ベネフィット認知が実験環境下でのリスクテイキングを規定した。つまり、低リスク状況下では損害を被る可能性や損害自体が行動に与える影響は小さいことを意味する。ただし現実場面では、被りうる損害が小さいかどうかは事故に遭遇して初めて分かる。そのため、低リスク状況下でのリスクテイキングであっても、例えば教育介入等によって矯正される必要がある。

引用文献

- Harinck, F., Van Dijk, E., Van Beest, I. & Mersmann, P. (2007). When gains loom larger than losses; Reversed loss aversion for small amounts of money. *Psychological Science*, **18**, 1099-1105.
- McKenna, P.F. & Horswill, M.S. (2006). Risk taking from the participant's perspective: The case of driving and accident risk. *Health Psychology*, **25**, 163-170.
- 森泉慎吾・臼井伸之介 (2013). リスクの有無がベネフィット認知に及ぼす影響. 日本リスク研究学会第26回年次大会講演論文集（Web公開）.

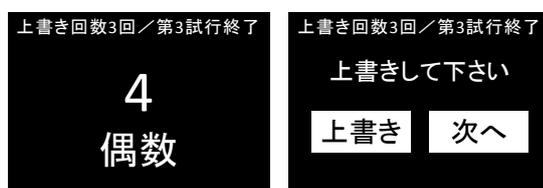


Figure 1 実験課題の模式図